

自然と歴史と産業が響き合い 地域の個性が響き合うまちづくり

全国3番目の面積と 個性豊かな各地域

平成18年3月に旧日光市、今市市、藤原町、足尾町、栗山村の2市2町1村による合併で誕生した新・日光市の総面積は約1450km²。栃木県の約4分の1を占めるとともに、岐阜県高山市、静岡県浜松市に次いで全国でも3番目に広い面積を持つ都市となった（人口は約9万人）。

全体の約87%が森林、約50%が日光国立公園の指定地域でもある広大な市内には、世界遺産に登録された「日光の社寺」、ラムサール条約登録湿地「奥日光の湿原」がある。また日本でただ一つ、特別天然記念物と国の特別史跡の二重指定を受けギネスブックに世界一長い並木道として登録された「日光杉並木街道」や、日本の近代化を支えた産業遺産を要件に世界遺産登録を目指す「旧足尾銅山施設」など、わが国が世界に誇り得る雄大な自然およ

び歴史的・文化的遺産が豊富にそろっている。面積の広さだけではない。市域に点在する市街地および集落の位置する標高が2000mから20000m近くにまでわたるといって、変化に富んだ地形が特徴的だ（市域の最高点は関東以北最高峰・白根山頂の2578m）。

また日光国立公園に指定されている北部の山岳地域は那須火山帯に属し、鬼怒川、川治、湯西川・川俣、奥鬼怒、奥日光湯元・中禅寺などの質量共に優れた温泉地帯を形成。自然景観や歴史的・文化的遺産と共に、日光市に年間約1120万人もの観光客を引きつける大きな魅力となっている。

「そうした地形の多様性は、当然、気象条件の多様性を生み出します。そして、その地に暮らす人々の生活文化にも多様な個性をもたらす、日光市に独自の地域資源を構築してきました」

そう語るのは斎藤文夫日光市長である。実際、日光市といえば従来は国際観光都市として知られていた。平成の大合併においては、2市以上を含む合併事例は非常に少ない。合併後に新市の中心点をどこに置くかが論点になりがちだが、その大きな理由の一つとしてある。しかし新・日光市の場合には、隣接しているながらも都市的性格が大きく違う旧日光市・旧今市市がうまくすみ分ける形で、絶妙な位置付けがなされた感がある。

「私自身は旧今市市の職員を経て、今市市長を2期務めさせていただき、2期目の途中で新・日光市の市長に就任しました。現在2期目に入っているわけですが、今市市長時代に今市市の紹介をするとき、関東地区であれば杉並木のあるまちといえ、たいいてい分かってくださいました。しかし、遠方の地方を訪問した際には「日光の隣町です」という言い方をしないと、皆さん、なかなか分かっていただけなかつた（笑）。今市地域と日光地域の現在の位置付けは、今後の新・日光市の発展を見据えた場合にも、全地域が納得できる形に落ち着いていると思います」（斎藤市長）

日光ブランドの 新たな創造がもたらすもの

日光地域の歴史は8世紀後半、下野の僧・



雄大で荘厳な雰囲気の花崗岩の滝(日光地域)



世界中の観光客でにぎわう世界遺産「日光の社寺」(日光地域)

勝道上人が男体山（二荒山）を関東の山岳信仰の聖地として開き、男体山を臨む地に二荒山神社、四本龍寺を創建したことから始まる。そして江戸時代初期に徳川家康を祀る日光東照宮が造営され、日光二荒山神社・日光山輪王寺（起源は四本龍寺）と合わせた現在の「日光山内」（二社一寺とも称されるが、世界遺産登録の際の指定名は日光山内）が構築されたことにより、その門前町となった。以来、常に宗教都市・山岳都市として繁栄を続けてきたのは周知の通りだ。

加えて近代以降は、中禅寺湖畔に在日本の各国大使などを中心に外国人が別荘を次々と建設するとともに、奥日光全域の優れた自然環境が世界的な人気を呼び、国際観光都市と



さいとうふみお
斎藤文夫
日光市長

世界遺産のまち・日光地域に加えて「市域の3分の2の人口を擁するとともに都市的集



明治17年に開設された本山製錬所(足尾地域)

日光市では現在、平成23年4月のオープンを目指し、厳正な生産基準・品質基準によって管理された日光ブランド農産物を一堂に集めて販売するとともに、観光・商工物産品・イベントなどの情報を発信する交流施設「日光ブランド情報発信センター(仮称)」を、日光だいや川公園内に建設する計画を進めている。また同事業を皮切りに、日光市では農・観・商工の連携推進、産・学・官の連携推進、伝統産業を含めた地域産業の中核的な人材の育成・支援などを図ろうとしている。

今回の取材では、日光市教育委員会生涯学習課世界遺産登録推進室のご協力と古河機械金属株式会社足尾事業所のご配慮により、一般非公開の施設を含めた旧足尾銅山を訪問することもできた。

足尾銅山の世界遺産登録を目指す活動は、旧足尾町時代から始まっていたが、日光市への合併後に急速に進展。平成19年9月には文化庁が公募する世界遺産暫定一覧表追加記載提案事業に、「足尾銅山―日本の近代化・産業化と公害対策の起点―」と題するコンセプトで栃木県と共同提案書を提出したものの、残念ながら暫定一覧表の記載には至らなかったという経緯がある。

足尾銅山を世界遺産に

にも新たな光を当てる、総合的な地域活性化施策であることが分かる。さらに日光という地名をイメージ核としながら、個性豊かな各地域がそれぞれの独自性で響き合い、同時に一体感を醸成しつつ、各地域の協働で新・日光市の歴史を構築していくこうとする、大きな「仕組み」ともいえる。



国指定史跡・通洞坑「足尾銅山観光」にはトロッコ列車で入坑(足尾地域)

しかし、その直後の平成20年3月には足尾銅山跡の「通洞坑、宇都野火薬庫跡」が国の史跡に指定されるなど、足尾銅山跡の文化遺産としての価値は高まるばかりだ(遺産登録活動の本格開始後に国指定史跡に指定されたのは2件、また国および県の有形文化財には1件ずつ指定されている)。

斎藤市長も「足尾銅山跡の世界遺産登録を目指す活動は、足尾地域の地域づくりを推進する大きな契機であり、同時に日光市全体のまちづくりにも大きな波及効果が見込まれる」と、大きな期待を持っている。さらに世界遺産登録活動による注目度の高まりの効果が一つとして、かつて大きな鉱毒被害を出したことから詳細な調査が難しい面もあった銅山経営企業側の社内文書の調査も可能になるなど、足尾銅山の歴史的な価値を改めて検証するのに不可欠な条件がほぼ整ったとい



日本を代表する温泉街・鬼怒川温泉(藤原地域)

して大きくクローズアップされるようになった。「非常に伝統的で、なおかつハイカラ」。こうした際立った二面性が独特の輝きを放つ日光地域の特性は、まさに日本および世界の宝であり、天然のブランド力を備えている。ちなみに今市地域は、日光東照宮の造営後に日光参詣のために整備された日光街道、例幣使街道、会津西街道が合流する宿場町として急速に発展した歴史を持つ。今市の地名は宿場町のにぎわいを目当てに、近在の農村や山村から豊富な物資が集まり「市」を形成するようになったことから生まれた。

藤原地域も同様に、まずは会津西街道の宿場町として江戸時代初期に開けた。その後、鬼怒川温泉や川治温泉が相次いで発見されたことにより、湯治場としても発展するに至った。「つまり日光地域、今市地域、藤原地域は、そうしたひとつながりの歴史の中で、深い関連性を持ちながら発展してきたといえるでしょう。日光地域はその特殊な成り立ちに育まれた「日光ブランド」を歴史的に発信し続けており、今市地域や藤原地域はそのブランド力を背景に、それぞれの特性を伸ばす形で、独自の個性を形成してきたわけです。それが現在、日光市の名の下に一体となったのは、歴史的な必然ともいえるように思います」(斎藤市長)

地域ブランドの構築と活用は現在、全国共通の重要なテーマとなっている。日光市もその例にもれないが、これまで述べてきたように、日光という地名には既に歴史的に培われてきた、天然の強力なブランド力があった。例えば豊かな森林資源から生まれた日光彫りや、清らかで豊富な水から生まれた「ゆば・そば・酒」などは、その品質の良さとともに、日光で生産されていることによる付加価値があった。さらに酒の醸造技術は味噌や醤油などの製造と不可分であり、豊かな農産物を加工した伝統的な漬物産業にもつながっている。

しかし、現代のし烈な経済競争や地域間競争を生き抜くには、そうした天然の素材なブランド力に頼るだけでは十分ではない。平成21年9月に策定された日光市産業振興ビジョ



伝統ある彫刻屋台と花屋台など10台の屋台が競演する屋台まつり(今市地域)

ンに基づき、日光市が改めて厳正な基準にのっとった「日光ブランド」を創造し、その評価を高めるための事業を展開し始めたゆえんだ。「これまで歴史的な流れの中で自然発生的に生まれてきた伝統産業とはまた別に、近年の日光市には、豊かな自然環境と良質で豊富な水資源を背景に、食品製造業などの新たな企業進出も進みつつあるという流れがあります。合併した地域には優れた農産物の生産地も少なくありません。それらの地域資源を単に活用するだけでなく、厳しい品質管理基準の下に高い付加価値を持つ日光ブランドの商品として創造し、育てることに加え、それによって伝統産業にも新たな光が当てられるようになることを目指しています」(斎藤市長)

「早期の一体感醸成」と「均衡ある振興・発展」は、新・日光市の大きな命題だった。限られた財源を有効活用しながら、その命題達成に最大の効果を挙げるため、日光市では果敢な行財政計画、総合計画、男女共同参画推進条例などを着々と策定し、推進してきた。

中でも平成20年4月に施行した「日光市まちづくり基本条例」の策定は、平成18年に新・日光市初代市長に就任した折から、一貫して「まちづくりの主役は市民（あなた）」「市民の皆さまに仕えることが私の仕事」という基本理念を市政経営の柱としてきた斎藤市長にとって、とりわけ大きな意味を持つものだったといえる。

また職員の人事交流も順調に進み、綿密に一周しようと思えば300kmは走行しな



資源循環型社会の形成を担う日光市クリーンセンター(今市地域)

よる計画的な植林活動の一方で、松木地区周辺の緑を復活させるべく懸命の活動を続けてきたのは、平成8年に地域住民が組織した「足尾に緑を育てる会」の会員たちだった。同会が発足後15年間で植えてきた樹木は計5万5400本（延べ参加者数約1万3000人）。「足尾の山に100万本の木を植えよう」という目標を達成するまでには気の遠くなるような時間と労力が必要だ。

しかし、市長の言葉にもあるように、この活動を通じて培われた地域づくりへの機運は、合併後の足尾地域の発展の大きな原動力ともなっている。またその機運は日光市が世界遺産暫定一覽表追加記載の提案書を正式に提出したことで、全市民的関心へとつながりつつある。

この活動のプロセスは、日光ブランド創造事業の持つ、人を育て地域を振興させる活性化効果と同じ仕組みを持っていることに気づく。もちろん足尾銅山が、いつの日か世界遺産へ登録されるに越したことはない。だがそれ以上に大切なのは、地域を挙げてそれに取り組み続けることにあるといえるだろう。

実際に訪ねてみた足尾銅山の跡地からは、文明の進化を支えるテクノロジーの力強さと同時に、もろ刃の剣ともなりかねない危うさの記憶がそこかしこに刻印されているのを感じた。そしてこれを世界遺産として維持保全することは、人類にとって確かに普遍的な意味を持つものだと思われたい。

ればならないという広大で変化に富んだ市域を、職員たちは今日も縦横に飛び回っている。さらに現在、日光市の今後50年、100年にわたって輝き続けるために不可欠な総合計画後期基本計画（平成24年度から実行）の策定にも取り組み始めたところだ。

ほかの都市と同様、日光市にも克服すべき課題は多い。しかし、これまでそのごく一端をご紹介してきたように、日光ブランドを旗印に多角的に取り組まれている地域振興・活性化事業は少しずつ、だが着実に成果を挙げつつある。

また、今後日光市の地域活性化を推進するに当たって、その有効な活用が期待される要素の一つに「豊富な水」がある。日光市内を流れる河川は渡良瀬川水系と鬼怒川水系に大別されるが、そこから派生する支流は非常に多く、また水質に優れ、数多くの美しい景観を形成している。例えば、日本の近代化を支えた足尾銅山の稼働力を、さらに根底から支えていたのも渡良瀬川や鬼怒川の支流である大谷川の豊富な水量を活用した水力発電だった。足尾の銅山としての鉱脈の資質もさることながら、これらの豊かな水量がすぐ近くになれば銅の生産量は大きく減り、日本の近代化にも少なからず影響があったかもしれない。

前述した日光市への近年の食品製造産業の企業進出も、豊かな水量があればこそ、酒・そば・ゆばなどの名産品も水質に優れた豊富な水のたまものである。

「日光市環境基本計画は、環境に関する最大テーマを『保全と賢明なる利用』と定めています。市域の87%を占める森林や多彩な自然景観も、健全な水循環が保たれているからこそ成り立っていますが、この循環を継承するためには、より循環をスムーズに進めるための仕組みづくりが必要です。そしてこの資源の循環を健全に保つことが、観光をはじめとする交流事業の活性化をもたらし、エネルギー利用などを通じた経済効果にもつながるはず」（斎藤市長）

水資源の循環の仕組みは、都市経営の仕組みと、うり二つだ。広大な市域の中で、個性豊かな各地域が響き合いながら一体感を醸成しつつある日光市の現状を目の当たりにして、そのような思いを抱いた。

(取材・文 遠藤 隆)



平家落人伝説の里・湯西川で昭和60年から実施されている平家大祭(栗山地域)



採鉱技術を支えた宇都野火薬庫跡(国指定史跡・足尾地域)

「合併後5年の現況と将来への展望」

日光市では今年度いっぱい、各地域を舞台に「個性ある地域振興事業・合併5周年記念にぎわいづくり事業」が展開されている。足尾銅山発見400年記念のPRイベント、地元産品を楽しむイベント、Uターン事業の促進を目指すイベント、子育て支援イベント、各種コンサート、桜の苗木の植栽事業など多岐にわたる。その多様さや「手づくり感」に満ちた内容から改めて感じられるのは、それぞれに特徴的な個性を持つわがまちを愛するとともに、日光市の名の下に醸成されつつある無理のない一体感の雰囲気だ。

広大な市域に点在する個性的な各地域の



ボランティア活動が盛んな日光市(シルバー人材センターの清掃活動)